

紹介

R・エンゲルジング著
(中川勇治訳)

『文盲と読書の社会史』

本書は Rolf Engelsing: *Alphabetentum und Lektüre: Zur Sozialgeschichte des Lebens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft* の全訳である。ドイツ語圏を中心として、文盲の存在と読書の営みの実態を「読書の量」の分析を通して究明したものである。

序説で、文盲の問題に関する従来の研究動向を、近代世界あるいは産業化の過程の解明のみが中心課題とされたと批判する。この「近視眼的考察方法」を乗り越えるべく著者は「特定の問題の解明をめざす社会学」に、「実践的文化研究を重視する書誌学」を結合することで、問題の範囲を対象の広がりに関して拡大しようとする。この枠組に於いて、13世紀初頭から始まる記述の中で、文盲率は必ずしも連続的に低下したのではなかったことが実証され、文盲率

低下の規定要因と原動力が歴史の変遷の中に明らかにされる。

以下、18章からなる本論の概略を追ってみる。まず第一章から第四章までは中世盛期から15世紀中葉の活版印刷発明までの読書の性格を分析することで、読書能力の普及過程が跡づけられる。

第六章から第十章までは宗教改革期からフランス革命前夜までを扱っている。宗教改革は印刷部数の増大と読者層の飛躍的拡大を伴ったが、特にルター著作は十六世紀最大の成功を収め政治的パンフレットの洪水を惹起した(第六章)。こうして読書意欲を刺激した宗教上の多元論が、領邦教會制に基づく国家宗教化の中で不寛容な教義に変質したこと、加えてラテン語学校等を通じて行なわれたドイツ語の排斥活動が、一時的に減少した文盲を再び広げた。著者はドイツの近代化を英・仏・露のそれと比較し、いち早く文盲率が近代化の水準にまで低下した十六世紀のドイツで、近代化に先立つ中央集権化が実現しなかったことを、その後の政治的発展の規定要因とみなす(第七章)。ドイツの文盲率減少の停滞は三十年戦争によって強化され、十八世紀中

葉まで続いたが、十七世紀の政治的激動は、定期刊行物の普及、そして供給面ではラテン語文書からドイツ語文書への移行をもたらし(第八章)。十七世紀中葉以降、一般就学義務が各領邦で導入されるが、極めて不完全なものであったので、読書人口の成長をもたらずに至らなかった。この背景として、経済発展の遅れと、固定化した身分秩序の下での教育観、読書観が挙げられる(第九章)。十八世紀中葉以降の人口増加と連動して、書籍生産の上昇が始まった(第十章)。

第十一章から十四章までは、フランス革命期から三月革命期までを扱っている。十八世紀中葉以降の読書熱は、啓蒙主義の影響を受けた種々の読書組織の出現を促し、新聞は中流階級に購読者を求めることで発展した。しかし政治上および教育上の権威主義がこの読書熱を一定の地域と社会層に限定していた(第十一章)。三月前期に至るまでの不徹底な学校行政と低い就学率の分析から、依然として、読書能力は家庭教育か独学の成果であることが明らかに(第十二章)。次いで、啓蒙主義の恩恵を受けなかった職人や農民が置かれた教育水

準が検討される（第十三章）。フランス革命の進展と歩を共にした読書普及の時期は、十九世紀に入ると革命精神の創造性涸渇による読書意欲の減退期に移行した。読書熱が再び興隆するのは、交通網拡大、工業化、都市化などによる社会的刺激の増大と共に国民意識・民主主義が高揚する三十年代以降であった。大衆読者を対象とした「絵入り雑誌」が登場し、三月革命期における新聞、パンフレット・宣伝ビラの氾濫を準備した（第十四章）。

第十五章から第十八章までは産業化時代を扱っている。十九世紀における文盲状況を推移を婚姻登録簿、新兵兵籍編入簿の分析から明らかにする（第十五章）。経済の近代化と連動した急速な文盲率の低下には、小学校制度の強化・拡充とともに自由主義者が指導した労働者教育協会等の協会活動も大きな役割を果たした。十九世紀後半これを受け継いだ社会民主主義運動には、労働者の烈しい教育渴望と読書意欲が内在していた（第十六章）。五十年代の政治的反動期に一時低下した書籍生産は、ドイツ帝国成立以降、不断の成長を遂げ、世紀末までには五〜二十五万部規模で流布する通俗読

物も登場した（第十七章）。十九世紀末以来設立が進んだ庶民図書館、労働組合文庫、社会民主党文庫等の利用状況から、産業化時代の庶民の読書傾向が検討され、政治の大衆化と読書の普及が合致することを明らかにする。第一次大戦までに文盲は、ほぼ消滅し、この戦争は「文盲と読書」が問題となる時代に幕を閉じた。情報・娯楽・通信の条件として、ラジオ・テレビが加わる新たな歴史的時代が始まった（第十八章）。

以上、論旨だけを紹介してきたが、伝統ある書誌学 *Buchwissenschaft* や新聞学 *Zeitungswissenschaft*, *Publizistik* の成果を体系的に採用している本書は、類書の邦訳が少なくだけにこうした分野の入門書としても有用であろう。

しかし、各時代を「教育―書籍生産―読書」の枠組で分析する本書の体系的な構成にもかかわらず、いくらか気になる点も存在するように思える。まず分析方法の統一性という点では、技術面で十五世紀の活版印刷の開始の意義を強調するのであれば、三月前期の蒸気力シリンダー印刷機の登場をまったく触れていないことなどは、体系を損う。

また本書の枠組においては、読み書き能力は読書の普及の規定要因となるのであろうが、それがどの程度の規定力を持つのかは必ずしも十分にはわからない。（たとえば、R・ウィリアムズは「長い革命」において大衆新聞の成長を論じる際に、読み書き能力を規定要因とすることを否定している。）

近年の「社会史ブーム」の中で既に、民衆の識字率の問題については、管見する限りでも、R・ホガート『読み書き能力の効用』、R・ウィリアムズ『長い革命』、C・チポラ『読み書きの社会史』、L・ストーン『エリートの攻防』、Ph. アリエス『子どもの誕生』等、参照できる研究書が邦訳されている。こうしたイギリス系・フランス系の「社会史」に加えて、いかにもドイツ的な「社会史」として本書が訳出された意義は、決して小さくない。ただ原著で四十二ページに及ぶ注釈が全部省略されているのは、後記に言う「処女地の発見を実証しながら、その土地に人々が移住して耕作するのを期待する」意図からして、いささか惜しまれよう。

（四六判）二六六頁 一九八五年三月

思索社・二〇〇〇円

（佐藤卓巳）京都大学大学院